

令和元年度資源評価報告書(ダイジェスト版)

[Top](#) > [令和元年度資源評価](#) > [ダイジェスト版](#)

標準和名 キアンコウ

学名 *Lophius litulon*

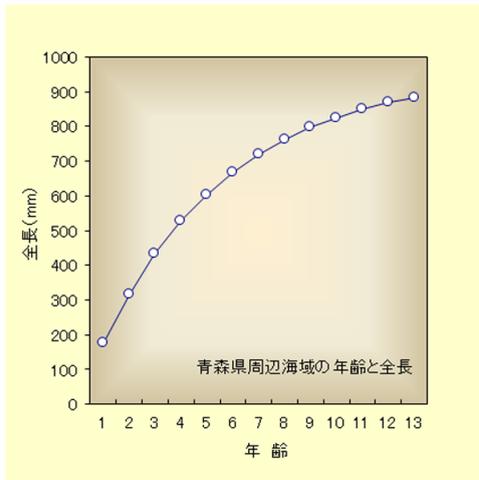
系群名 太平洋北部

担当水研 東北区水産研究所



生物学的特性

寿命： 不明
成熟開始年齢： 不明
産卵期・産卵場： 5～6月（津軽海峡東部沿岸）、5～7月（仙台湾周辺）、4月から遅くとも8月（福島県中部海域）
食性： 小型個体は小型魚類や甲殻類、成長につれカレイ科魚類、タラ科魚類、イカナゴ、ギンアナゴ、カタクチイワシ、スルメイカ、トラサメなど
捕食者： ミズウオ

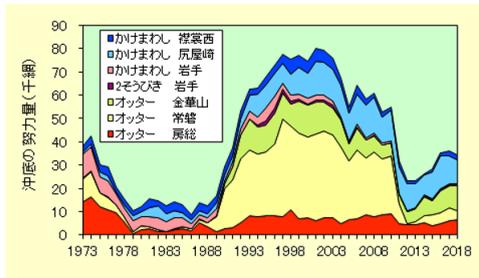
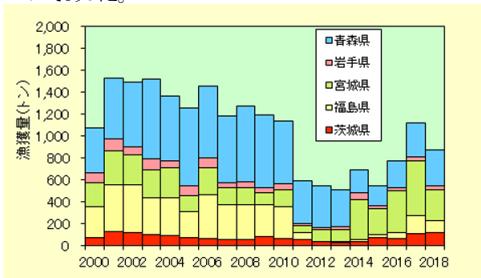


漁業の特徴

太平洋北部海域では沖合底びき網漁業(沖底)、小型底びき網漁業(小底)を主体として漁獲されている。また、底刺網漁業や定置網漁業でも漁獲されている。全体の漁獲量の内訳をみると、沖底の割合が最も高く、2018年は沖底、小底、その他漁業種(刺網、定置網など)の割合はそれぞれ53%、17%、30%であった。尻屋崎～襟裳西海区および金華山～房総海区が主漁場である。産卵期に産卵親魚が多く漁獲されている。

漁獲の動向

全県の合計漁獲量は、2011年の東日本大震災(震災)以降大きく減少したが、これは震災および福島第一原発事故による操業休止によって努力量が減少した影響が大きい。2014年以降は回復傾向となり、2018年は869トンとなった。漁獲量の県別内訳は、2018年は青森県327トン、岩手県35トン、宮城県282トン、福島県107トン、茨城県119トンであった。

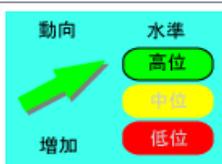


資源評価法

生物学的な系群は不明であるが、漁獲量が多い海域は青森県沖と宮城県以南沖の2つに分かれ、単位努力量あたり漁獲量(CPUE)の変動傾向も尻屋崎～襟裳西海区と金華山～房総海区で異なる。そのため、資源の水準と動向は尻屋崎～襟裳西海区と金華山～房総海区のそれぞれについて判断した。資源量指標値として沖底のCPUEに含まれる月や海域の影響を除いた標準化CPUEを用いた。標準化CPUEは沖底漁獲の情報を用いて算出した。

資源状態

尻屋崎～襟裳西海区と金華山～房総海区のそれぞれについて、平均値を1となるよう規格化した標準化CPUEの値が1.3より高い場合を高位水準、0.7より低い場合を低位水準とした。尻屋崎～襟裳西海区の2018年の標準化CPUEは1.397であるため水準は高位、直近5年間(2014～2018年)の推移から動向は増加と判断した。金華山～房総海区の2018年の標準化CPUEは1.904であるため水準は高位、直近5年間(2014～2018年)の推移から、動向は増加と判断した。両海区とも資源水準は高位、動向は増加であることから、太平洋北部全体の資源水準は高位、動向は増加と判断した。





管理方策

資源水準に合わせた漁獲を管理目標とし、2つの海域ごとのABCを算定し、合算して2020年ABCを求めた。価格が安い産卵期に多くの産卵親魚を漁獲していることから、これらの漁獲を削減し、価格の高い冬季に漁獲することで、産卵親魚の保護と資源の有効利用を図ることを提案する。金華山～房総海区は震災後の努力量減少による資源量増加が示唆されており、努力量を適切な水準に維持することで、高い資源水準を保ちつつも、震災前より高い漁獲量を達成する可能性がある。また、本系群では海域ごとに資源動向が異なっていることから、海域ごとに資源管理を実施することも重要である。

管理基準	Target/Limit	2020年ABC (トン)	漁獲割合 (%)	F値 (現状のF値からの増減%)
1.0・尻屋崎～襟裳西海区Ct・1.131	Target	940	—	—
1.0・金華山～房総海区Ct・1.097	Limit	1,180	—	—

- ABC算定規則の2-1)により、 $ABC_{limit} = \delta_1 \cdot Ct \cdot \gamma_1$ で計算した
- Limitは管理基準の下で許容される最大レベルの漁獲量、Targetは資源変動の可能性やデータ誤差に起因する評価の不確実性を考慮し、管理基準の下でより安定的な資源の増大または維持が期待される漁獲量
- $ABC_{target} = \alpha \cdot ABC_{limit}$ とし、係数 α には標準値0.8を用いた
- 両海区とも、 δ_1 には1.0(高位水準における標準値)を用いた
- 尻屋崎-襟裳西海区では、Ctには2018年の青森県と岩手県の漁獲量の合計値(362トン)を用いた
- 金華山-房総海区では、Ctには2018年の宮城県と茨城県の漁獲量、および2008～2010年の福島県の平均漁獲量の合計値(703トン)を用いた
- 尻屋崎-襟裳西海区の γ_1 (1.131)および金華山-房総海区の γ_1 (1.097)は、 $\gamma_1 = 1 + k(b/I)$ で計算し、kは標準値の1.0とし、bとIは、それぞれ、海域別の直近3年間(2016～2018年)のCPUEの傾きと平均値(尻屋崎-襟裳西海区:b=0.159、I=1.211、金華山-房総海区:b=0.175、I=1.800)である
- ABCは10トン未満で四捨五入した

資源評価のまとめ

- 資源水準は高位、動向は増加
- 尻屋崎～襟裳西海区、金華山～房総海区は両海区とも資源水準は高位、動向は増加

管理方策のまとめ

- 資源水準に合わせた漁獲を管理目標とし、2020年ABCを求めた
- 価格が安い産卵期の漁獲を削減し、価格の高い冬季に漁獲することで、産卵親魚の保護と資源の有効利用を図ることを提案する
- 本系群では海域ごとに資源動向が異なっていることから、海域ごとに資源管理を実施することが重要である

執筆者: 時岡 駿・成松庸二・柴田泰宙・鈴木勇人・森川英祐・永尾次郎

資源評価は毎年更新されます。